

オンライン国際連携学習 (COIL) における試み： ナラティブ交換とエンパシー概念の共有の有効性について

Narrative Exchange and Empathy in Online International Collaborative Learning (COIL)

山下 美樹

1. はじめに

2019年に発症したコロナウイルス感染拡大の影響により、海外留学が困難な昨今、国際連携学習 (Collaborative Online International Learning) (以下COILと呼ぶ) が全世界にその広がりを見せている。COILはオンラインでつながり、国を超え同じ課題で共修する取組みとして、2006年にニューヨーク州立大学 (SUNY) で開始された。オンラインツールは、いつ、どこでも、誰とでも容易につながることを可能にさせるが、教育ツールで使用する際は、オンライン上の協働を円滑にするための工夫が要される。例えば、協働する双方が、お互いの文化的価値観の違い、コミュニケーションスタイル (言語・非言語) の違い、個人が置かれている状況 (自然災害、社会問題、他) を知る必要がある。さもなければ、オンライン上で起こるコミュニケーション上の誤解、返答の遅れといった意思疎通の滞りやメンバーの参加度の低下、そして、第二言語で会話をすることに自信がもてず、「どうせ分かり合えないだろう」といった思い込みや「面倒だ」という感情などが障壁となり、協働がうまくいかなくなることもある。

オンライン授業をさらに拡充させ、異なる文化背景をもつ学生達が真摯に対等な立場で向き合い学び合う場を構築するために、教員はどのような教育の足場かけができるだろうか。2019年と2020年に実施したCOIL授業では、ナラティブ交換をアイスブレイキングに導入することで、参加学生間の相互尊重と理解の向上が見られ (山下, 2021)、2020年には、「共感 (Empathy)」の概念をプロジェクトの実践枠組みとして取り入れることで、協働する双方のチームワークがより強固なものとなり、プロジェクトそのものにもその有効性が見られた。本稿では、上述した協働上の問題点を緩和するための方策として、COIL授業において「共感 (Empathy)」の概念を実践的枠組みの中

心におき、参加学生間の相互尊重と理解を高めるためのナラティブ交換の有効性について考察する。

2. 実践の背景

本学でのCOIL授業の実施は、2019年度2学期が1回目、そして、2020年度2学期が2回目となる。どちらも使用言語は英語である。1回目のCOIL授業では、計16名が受講した。本学の学生の英語レベルがTOEIC平均450点であったため、アメリカのパートナー校の4名のサービス・ラーニング科目を受講する成人教育学科の大学院生が、本学の英語科目 (Advanced Critical Reading) の授業を受講する、経済学部1年生12名をリードする体制で実施した (山下, 2021)。本学の学生は全面的にパートナー校の大学院生の誘導に従ってプロジェクトを行う形となったが、海外の大学院生と英語で協働プロジェクトを行うことで満足感を得、自信をつけることができた。

2回目のCOIL授業では、計13名が受講した。今回も同じアメリカのパートナー校でサービス・ラーニング科目を受講する新たな4名の成人教育学科の大学院生と、本学から9名が参加し共修した。2回目のCOIL授業は、本学では英語科目ではなく、Intercultural Communication (使用言語は英語) の授業で実施した。受講者は7名 (内1名が中国出身、1名がパキスタン出身) の3年生に加え、大学院生2名 (中国と台湾出身) が受講した。受講条件として、英語レベルをTOEIC600点以上に限定したこと、そして、本学の学生9名全員が海外留学を体験しており、また3名は外国にルーツをもつ学生であったことから、1回目のCOIL授業よりも、パートナー校の大学院生と、より対等にリーダーシップをとりながらプロジェクトを進めることができた (以下、表1参照)。

表 1

回	開講科目・参加者・ナラティブ交換の方法・PBL テーマ
1 回目 2019 年 2 学期	<p><科目名：Advanced Critical Reading (使用言語は英語)>で実施</p> <p><参加者>計 16 名とその内訳</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本学：経済学部 1 年生 12 名 (TOEIC 平均 450 点) ・アメリカパートナー校：成人教育学科大学院生 4 名 <p><ナラティブ交換の方法></p> <p>Facebook に各自の自己紹介動画 (1 分間) を掲載</p> <p>*アイスブレイキングを兼ねて文化的人工物 (Cultural Artifact) を使い、自己のライフストーリーの一部を切り取ったナラティブ交換を行った。</p> <p><PBL 活動テーマ：自然災害から海外観光客を守る> 4 チームのトピック</p> <ol style="list-style-type: none"> ① Evacuation Instructions for International Visitors to the Asakusa Shrine (浅草を訪れる観光客のための非難対策) ② Dealing with Heatstroke (熱中症対策) ③ Evacuation Measures in the Event of Flooding (水害による非難対策) ④ Evacuation Measures for Natural Disasters (自然災害時の避難対策)
2 回目 2020 年 2 学期	<p><科目名：Intercultural Communication (使用言語は英語)>で実施</p> <p><参加者>計 12 名とその内訳</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本学：経済学部 3 年生 6 名、外国語学部 3 年生 1 名、経済研究科大学院生 2 名計 9 名 (TOEIC 平均 600 点) ・アメリカパートナー校：成人教育学科大学院生 4 名 <p><ナラティブ交換方法></p> <p>Zoom ミーティング (同期型)</p> <p>*アイスブレイキングを兼ねて文化的人工物 (Cultural Artifact) を使い、自己のライフストーリーの一部を切り取ったナラティブ交換を行った。</p> <p>*その他、情報交換ツールとして SLACK を使用</p> <p><PBL 活動テーマ：ユニバーサルデザイン (UD) について> 4 チームのトピック</p> <ol style="list-style-type: none"> ① Universal Design (UD), Equity and Park Restrooms: For the Blind, for Everyone (UD、公正、公共トイレ：視覚障がい者のために、みんなのために) ② Universal Pictograms (ユニバーサルピクトグラム) の提案) ③ Lack of UD for International Travers (海外旅行者にとっての UD の不足) ④ Absence of Universal Design (UD) : Mobility Impairment and Hotel Rooms (モビリティ障害とホテルの客室) <p>*「共感 (Empathy)」の概念を協働学修の過程で適宜共有した。</p>

2019 年度の 1 回目と 2020 年度の 2 回目の COIL において、文化的人工物 (Cultural Artifact) を使い、自己のライフストーリーの一部を切り取ったナラティブ交換を行った。ナラティブは、出来事や経験の具体性や個別性を重要な契機にし、それらを順序立て、二つ以上の出来事をむすびつけて筋道立てる行為と定義されている (やまだ, 2000a)。これら 2 回の COIL 授業で実施したナラティブ交換は、1 分以内の短い自己紹介として行った。Riessman (1993) のナラティブの研究は単一の学問分野にはとどまらないという主張のように、社会科学分野の医療、心理、社会福祉、紛争解決等、人に関するあらゆる問題に応用できる概念である (野口, 2009)。したがって、人との関係性、つながりに関してナラティブ交換は有効であると言えるだろう。ナラティブの交換は、情緒システムを起点に認知と行動に作用し、それが感情的交流の基盤となり、相互理解と尊重を促す (Gergen & Gergen, 2004)。つまり、ナラティブの交換は、オンライン上のコミュニケーションにおいてもその効果が発揮されることが期待できる。したがって、COIL 授業でのナラティブ交換が引き出す潜在的可能性として、プーバー (1973) が関係性について示す「我－それ」の関係から、「我－汝」の関係構築へのシフトを可能にすると考えられる。そして、ナラティブ交換は参加学生間の相互尊重

を引き出し、ひいては共感力の向上に寄与すると考えられる。

2019 年度 1 回目の実施では、各参加者が 1 分間以内の自己紹介動画 (英語) を作成し、それを Facebook に載せ共有し、コメントを投稿し合い文化の違いについて感想を交換した。その自己紹介動画では、文化的人工物 (Cultural Artifact) を使った。例えば、日本文化の紹介として、赤べこ、おにぎり、だるま、他があった。各学生には、それらの文化的人工物 (Cultural Artifact) を選んだ背景としての自分自身の体験を加えてナラティブを作成してもらった。一人の学生は「おにぎり」を選び、おにぎりを実際に見せながら動画作成した。その自己紹介のナラティブの日本語訳は次のとおりである。

この日本のおにぎりを、皆さんにお伝えしたいです。ここで私の話をさせてください。母のにぎってくれたおにぎりは私の元気の源です。私は中学生の頃、ソフトテニス部に所属していました。土日は朝 8 時から夕方 4 時まで 8 時間くらい練習していました。時には大会もありました。そのため、朝 5 時半に家を出て、夜 9 時頃には家に帰らなければなりません。とてもハードでスランプに陥ったこともありました。また、チームのメン

バーとの衝突もあり、悩みに悩んで何度も泣きました。母は私が頑張れるようにと、いつもおにぎりを作ってくれました。おにぎりを食べると元気が出るのです。おにぎりの中にはいろいろなおかずが入っていて、どれも美味しかったです。おにぎりの中に何が入っているか考えるのも楽しいです。おにぎりの中には、梅や漬物、魚など、好きなものを入れることができます。母が朝早く起きて作ってくれた高菜のおにぎりは母のオリジナルで、私の大好物です。おにぎりはシンプルでヘルシーな日本食です。サンドイッチのように指でつまんで食べることができ、スポーツ選手のエネルギー源としても最適です。母が作ってくれたおにぎりのおかげで、私はさまざまな困難を乗り越えることができました。あなたもオリジナルのおにぎりを作ってみませんか？ありがとうございます。

2020年度2回目のCOIL授業では、ナラティブ交換の動画作成の代わりに、日米双方の参加者の、初顔合わせのためのZoomミーティングでアイスブレイキングを兼ね、自己紹介として自己のライフストーリーの一部を切り取ったナラティブ交換を行った。双方の参加学生は文化的人工物 (Cultural artifact) を使い、各自がそれにまつわる自分自身の体験を一分以内で紹介し合った。例えば、パートナー校のアメリカ人大学院生の一人は、文化的人工物 (Cultural artifact) に「てんとう虫」のネックレスをとりあげた。その自己紹介のナラティブの日本語訳は次のとおりである。

私は、文化的人工物 (Cultural artifact) というよりも、家族にまつわるものとして「てんとう虫」のネックレスを選びました。これは私にとってとても大切なものです。数年前に亡くなった家族のメンバーの一人が持っていたものです。これは彼女のお気に入りでした。私たちはこれをドニーバッグと呼んでおり、家族にとって大切なシンボルです。家族メンバーの多くは、亡くなった彼女を思いつてんとう虫のタトゥーを入れています。私は彼女を誇りに思います。これは私にとって希望のシンボルです。これを見るたびに彼女を思い出し、私は元気をもらいます。それによって活動や挑戦を続けることができます。ありがとうございます。

このように、文化的人工物 (Cultural artifact) を使ったナラティブ交換は、個人の経験や価値観などについ

てのみならず、文化学、民族学、社会学などの学際的な分野についての情報交換が可能となる。これらの情報交換は共感力を醸成するうえで必要不可欠であり、有益な情報となったと言える。その例として、この「てんとう虫」のナラティブを共有してくれたアメリカ人大学院生とグループを組んだ本学側の学部生の一人は、グループ活動中にそのアメリカ人大学院生から返事が返ってこないなどの不安な期間を体験したが、そのようなときでも、その大学院生の「てんとう虫」のナラティブから感じ取った「家族への思い」に共感を得たことで、「その学生を信じる気持ちをもち続けることができ、グループ活動を完結することができた」という内省のコメントを授業中に共有してくれたこともあった。

次に1回目と2回目のCOIL授業の違いについて言及すると、1回目の実施では、プロジェクト実施の際、パートナー校の大学院生が本学の学生を全面的にリードする形で行ったが、2回目は、本学の学生も能動的にグループ活動を遂行し、リーダーシップをとれるよう工夫した点である。その準備として、自己紹介のナラティブ交換の後ではあったが、授業前半にパートナー校との協働を開始した時点で、「共感 (Empathy)」の概念を紹介し理解を深めた。そのきっかけとなった一つの理由は、2020年は実に全世界で災難の多い年であったことである。それは、アメリカのパートナー校の地域で起きた自然火災などの状況が非常に困難であったことを理解することで、相手への思いやりや、適切な対応の仕方を模索する心構えができたと言える。

2020年は、コロナウィルスの感染拡大にともない、双方共に授業形態が全面的にオンラインに切り替わり、双方の学生にとってより挑戦の年であった。パートナー校の状況については、パートナー校が位置するアメリカの西海岸では大規模な山火事、森林火災が9月から10月にかけて発生し、およそ一ヶ月以上にわたり灰と煙で空気汚染が拡大し、空がオレンジ色に染まる異様な状況が続いた (BBC News Japan, 2020)。都市部近郊でも多くの住民が避難を余儀なくされ、外出を控えるよう通達もあった。森林火災は突然大きくなる可能性があるため、住民たちは非常におびえており、都心部に住む人々もいつでも避難できるよう準備をしていたと語っていた。またコロナウィルスの感染拡大の影響により、11月26日の国の記念日であるThanksgiving Dayも家族で集まることができない状況であったため、パートナー校の学生たちは、今年はオンラインで祝う予定だと語っていた。さらに同時期にアメリカ大統領選挙があり、その学生たちにとって

は非常に緊張した時期であったようである。このようなアメリカのパートナー校の側で起こっている社会問題に触れ、相手側の事象について理解を深めた。

また、本学側の学生たちにおいても、3年生が主に受講していたため、慣れないオンライン授業や就職活動、オンラインインターンシップを両立している学生が多く、彼らにとって新しい挑戦の時期でもあった。一つの例として、本学側の参加学生9名のうち1名の履修辞退があった。そこで「共感 (Empathy)」の概念を日米チームの協働活動の実践枠組みの概念として改めて共有し、履修を途中で事態した学生の立場に立って、日米チームの参加者全員でディスカッションを行うことで、気持ちの共有とその後のチームの方針について確認することができた。その結果、その欠員を埋めるために、本学の別のグループから一名が自主的に協力を申し出てくれた。

3. ナラティブ交換とエンパシー概念の共有の有効性

COIL は動画作成ツールなどを使用し、国内に居ながら国や時間帯、言語の違いを超えて海外のさまざまな大学生とつながり、異なる文化的な視点から一つの課題について共修する取り組みである。それゆえ、学生間の主体的な協働の下、相互の学び合いにおける異文化間理解を重視する (山下, 2020)。Bennett (1998) は、異文化間理解には sympathy ではなく「共感 (Empathy)」が重要であると主張している。Sympathy は、他人の立場や状況に自分自身がおかれたときに、自分だったらどう考え感じるかに基づく「同情」や「思いやり」であるが、「共感 (Empathy)」は他の人の考えや気持ちについて、相手の視点からどのように想像するかという点である (Bennett, 1998; Wispe, 1968)。「共感 (Empathy)」は感情の読心能力であり人間関係を円滑に築くための基本的能力であり (福田, 2008)、ナラティブは、「利他性」や「共感」の教育に相当するものである (孫, 2019)。したがって、COIL 授業において、ナラティブの交換は、さまざまな違いを超え参加者の「共感 (Empathy)」を醸成させるうえで有効的なアプローチであると言えよう。

そこで、2020 年度の COIL 授業から「共感 (Empathy)」の概念を実践的枠組みの中心におき、参加者間のナラティブ交換を積極的に導入した。その効果として、一つ目に、心理的距離が縮まり、二つ目に、参加学生間の相互尊重と理解が促進され、三つ目にユニバーサルデザインを考えるうえで役立ったこと、の3点が挙げられる。

一つ目に、ナラティブ交換がより参加学生たちの心

理的距離を縮めることに役立った。アイスブレイキングを兼ねた自己紹介で、自分の文化に関係する思い出の品、大切な物を見せながら、それに関係する自己の体験を語り、そして、他のナラティブにも傾聴する。そうすることで、日米チームのメンバー間の家族構成、仕事、趣味、思い、置かれている現状などについて知り、相手の立場に立った新しいものの見方ができるようになることを目的として導入した。すべての学生が「共感 (Empathy)」の概念に対して理解を深められたとは言えないが、自己紹介のナラティブ交換の後であっても、その概念を知ることによって、その後の活動課程で双方の心理的距離を縮めるのに役立ったと言える。

ちなみに、パートナー校の大学院生との最初の顔合わせで、ナラティブ交換を行った後、本学9名の学生にアンケートを行ったが、相手との心理的距離間について、9名中5名が「より親しみを感じた」と答え、残りの4名は「どちらとも言えない」であった。「より親しみを感じた」と答えた5名は参与観察の結果、より能動的に他者との関わり相互尊重を働きかける傾向が高かった。例えば、パートナー校の大学院生との Zoom で、質疑応答の際には率先して意見を述べ、グループ活動の結果を積極的に報告、連絡、相談をしてくれた。その結果、これらのリーダーシップをとった学生が、他の学生を牽引し、学生グループ間で相互尊重の関係性が構築された様子が見受けられた。

二つ目に、参加学生間の相互尊重と理解の促進については、次の二つの事例、(a) と (b) の問題解決からその効果が確認できた。まず、事例 (a) としては、前述にあるようにプロジェクトの半ばで本学側から1名が履修を辞退したことで、グループ間のコミュニケーションの停滞が見られたことがあった。そこで、履修を辞退した学生本人には、その理由を SLACK と E メールでメンバーと共有してもらい、日米チームとの合同 Zoom ミーティングでは、残されたチームメンバー2名の気持ちを参加者全員と共有してもらった。その2名からは、「このままプロジェクトが継続できるのか不安だと感じた」、「メンバーが欠けて残念だ」といった正直な気持ちが共有されると同時に、本人の立場を考えると「抜けたメンバーの立場を理解し尊重する」という前向きな発言も出た。日道 (2016) が示すように、「共感 (Empathy)」は、他者の感情や心的状態の理解を助け、それに応じた行動を促すため、社会的生活に重要な概念の一つである (p.38)。したがって「共感 (Empathy)」の概念を、協働学修の過程で適宜共有したことで、学生たちが困難に直面したときにも建設的な意味生成の促進を手助けとなり、相互尊重とより強固な協力体制を構築するうえでも役

立ったと言える。

次に事例 (b) としては、アメリカのパートナー校の大学院生と連絡が取れないチームがあった。しかし、2回目の COIL 授業では、本学の学生たちは受身の体制で相手から連絡が来るのをただ待つだけではなく、能動的に連絡を取ることができるようになった。連絡が滞っていたパートナー校のメンバーに連絡を入れていた学生に確認したところ、「相手の現状を知ることでは何かこちらからサポートできることがないか」という思いで連絡を入れているとのことであった。このように、「共感 (Empathy)」の概念を知ること、思いやりの心が能動的な働きかけを促進し、ひいてはリーダーシップ力を醸成すると言える。

三つ目に、ユニバーサルデザインを考えるうえで、全4チームが「共感 (Empathy)」の概念を最終プレゼンテーションの中で取り上げていた。4チームの発表内容は、① Universal Design (UD), Equity and Park Restrooms: For the Blind, for Everyone (UD、公正、公共トイレ：視覚障がい者のために、みんなのために)、② Universal Pictograms (ユニバーサルピクトグラムの提案)、③ Lack of UD for International Travers (海外旅行者にとってのUDの不足)、④ Absence of Universal Design (UD) : Mobility Impairment and Hotel Rooms (モビリティ障害とホテルの客室) であったが、特に① Universal Design (UD), Equity and Park Restrooms: For the Blind, for Everyone (UD、公正、公共トイレ：視覚障がい者のために、みんなのために) のチームにおいては、本学の学生が率先して近隣の公園にある公共トイレに足を運び、その設備の不十分な点を調査しアメリカのパートナー校の大学院生にも報告し、ユニバーサルデザインの提案を行った。まず、視覚障がい者の視点から、次の3点を撮影し指摘した。公園から公共トイレまでの入り口の点字タイルが途中で途切れていること (学生撮影写真1)、トイレの扉の鍵の位置が分かりにくいこと (学生撮影写真2)、そして、トイレ内部の非常ボタンの表示に点字がついておらず、それらの非常ボタン表示はすべて日本語で書かれているため、それらを読めない者にとっては、どれが非常ボタンでどれが水洗ボタンなのかの区別が付きにくいこと (学生撮影写真3)。このように、当事者の立場を理解するために自主的な行動が促された。

このグループは、最終のグループ発表の中で、以上の公共トイレの問題点を指摘し、その後、改善策としてハイテクノロジーが使われた公共トイレの紹介を行った。最後に公共トイレのユニバーサルデザインを考えるとときには共感力が必要であることを次のように



学生撮影写真1



学生撮影写真2



学生撮影写真3

まとめている。

私たちのプロジェクトでは共感力を意識することが助けとなった。公共トイレのユニバーサルデザインを考えるとときに、次の項目を掲げる、①公共トイレは誰にとっても優しいものでなければならない、②共感力がなければ、障がい者のニーズを決して発見できないだろう、③障がい者の立場になって考えてみるのが大切だ。(UD, Equity & Park Restrooms: For the Blind, for Everyone グループの発表より)。

4. おわりに

今後オンライン授業は対面授業の代替手段ではなく、有効な教育方法として急速に発展していきだろう。オンライン教育上でのミスコミュニケーションを回避し、よりよい異文化コミュニケーションを行うために、ナラティブ交換とエンパシー概念の共有は有効であると言えよう。教師中心の教授主義から、学習者中心の他者から学ぶ社会構成主義へと教育環境が変化するなか、学生が置かれている背景を理解することはプロセス志向の教育において重要である。今後の研究として、2020年のCOIL授業での参与観察で得られた、能動的に他者と関わり相互尊重を働きかける人ほど質の高い対話ができているという作業仮説を基盤に、COIL授業におけるナラティブ交換の導入が、参加学生間の相互尊重の構築と対話能力の向上に、どのような影響が与えられるかを考察し、ナラティブ効果の概念化を目指したい。

参考文献

- Bennett, M. J. (1998). Intercultural communication: A current perspective. In M. J. Bennett (Ed.), *Basic concept of intercultural communication: Selected readings* (pp. 1-34). Yarmouth, ME: Intercultural Press, Inc.
- BBC News Japan (September 3, 2020) 「米西海岸の森林火災、オレゴン州で数十人が行方不明」
<https://www.bbc.com/japanese/54136067> (閲覧日 2020年9月10日)
- Gergen, K. & Gergen, M. (2004). *Social construction: Entering the Dialogue*. Wallingford, PA: Taos Institute Publications.
- Riessman, C. K. (1993). *Narrative analysis*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Wispé, L. G.(1968). Sympathy and empathy. In D. L. Sills (Ed.), *International encyclopedia of the social sciences* (Vol. 5) (pp. 441-447). New York: Macmillan.
- 孫大輔(2019)「4. 患者の語りを用いたプロフェッショナルナリズム教育—4.1 患者のナラティブ動画を活用した医学教育」『委員会報告：プロフェッショナルナリズム教育方略 連載第4回 医学教育』50(5), pp.507-511.
- 野口裕二 (2009) 「ナラティブ・アプローチの展開」同著者編『ナラティブ・アプローチ』勁草書房
- 日道俊之 (2016) 「共感の多層的なメカニズムの検討：イメージング・ジェネティクス研究から」エモーション・スタディーズ第2巻1号 pp.38-45.
- 福田正治 (2008) 「共感と感情コミュニケーション(1) 共感の基礎」『研究紀要 富山大学杉谷キャンパス一般教育』36, pp.45-58.
- ブーバー、M. (1973) 『我と汝・対話』植田重雄訳、岩波文庫
- 山下美樹 (2021) 「オンライン国際連携学習 (COIL) の実践と考察：海外パートナー校の大学院生による学習支援」『麗澤大学紀要』104 巻 pp.107-113.
- やまだようこ (2000a) 「展望 人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か?」『教育心理学年報』39, pp.146-161.